



↑車いす体験では、マットを使って段差の上り下りを体験しました

10月15日、伊万里小学校で『介護のお仕事出前講座』が行われました。

これは、介護を必要とする高齢者が増え、介護の仕事の重要性が増している中で、児童に介護や福祉を身近に感じてもらい、今後の進学・就職の参考や、市で働くきっかけにしておこうと、市や社会医療法人謙仁会ケアポート楽寿園の介護福祉士、社会福祉協議会などが連携して開いたものです。

参加した4年生83人は、装具を装着して、高齢者の動作・視覚・聴覚を疑似的に体験したり、車いすに乗りました。

介護のお仕事 出前講座

みんなで
考えよう
人権・同和問題
No.279

このコーナーは、隔月のシリーズで掲載しています。これを手がかりに、家庭で人権・同和問題について話し合ってみましょう。

●問合先 生涯学習課人権・同和教育係 ☎23・3186

ともに生きる

『ヘイトスピーチ解消法』が施行されて9年が経ちました。この法律が制定された背景には、外国人や海外にルーツを持つ人たちに對する深刻な人権侵害が続発していたという現実があったことを、私たちは深く受け止めなくては いけません。

法律による啓発効果もあり、市民の人権問題への関心は高まりをみせていますが、外国人や海外にルーツを持つ人たちに對する先入観や決めつけ、偏見などは根強いものがあります。

人は、自分と違うことや、知らないことに不安を感じます。未知のものに備えようとする人間の本能なのかもしれません。ですが、不安を理由に、自分と違う言語を使う人や、異なる宗教・文化を持つ人を遠ざけようとすることは許されることではありません。

伊万里市には、千人近くの外国人が暮らしています。その多くは、技能実習や特定技能制度で働く、市の産業を支える貴重な人材です。同時に大切なことは、市で暮らす外国人は、単なる労働者やお客様ではなく、ともに生きる地球市民だということです。『袖触れ合うも他生の縁』と云いますが、世界の人口82億人のうち5万1千人が同じまちで暮らすこの巡り合いは、奇跡と言えるのかもしれない。

この奇跡を生かし、お互いの国の文化に触れ合ってみませんか。難しく考えずに、料理など身近なことに関心を持つことから始めてみましょう。お互いを知り、理解し合うことで不安が解消されます。そこそが、文字どおり、私たちが『ともに生きるための多文化共生』の社会を創る第一歩になるはずです。

郷土の文化財

●問合先 生涯学習課文化財係 ☎22・1262

骨と土器づくり

写真1は、牧島保育園の近くにある宮ノ前北遺跡から出土した縄文式土器（深鉢）の底部で、外側部分がでこぼこしています。

底の部分は、土器を作るときに使った台の表面がスタンブのように、そのまま残っています。この、でこぼこした痕跡は、いったい何を下に敷いていたのでしょうか。

答えは写真2です。この板状のものは、鯨の背骨（脊椎骨）の一部（骨端板）です。でこぼこした面に土器の

底の部分となる粘土を置いて、土器を作っていました。このため、土器の裏側に、でこぼこの痕跡が残っていたのです。

縄文時代には、土器を作るときに植物で編んだ編み物や木の葉などを下に敷いて、土器を動かしやすいように工夫していました。

この鯨の骨の台を利用していた土器は、縄文時代中期末から後期初頭（約4500年前）に作られ、阿高式土器と呼ばれています。



↑写真1（土器の底部）



↑写真2（鯨の背骨の一部）